

励ましをありがとう 高校生が仮設広場で和太鼓演奏



(上)笑顔はじける圧巻の演奏 (右)集まった住民と握手。「ありがとう」に涙ぐむ部員も。心優しい高校生です



7月20日、日本福祉大学附属高校(愛知県)の和太鼓部「楽鼓(らっこ)」が、松川第一応急仮設住宅の広場で演奏し、住民と交流しました。この訪問は昨年続く2回目です。大迫力のパフォーマンスに、集まった20人余りの住民らは、精一杯の拍手を送り、演奏後には、「暑い中、ありがとう」「来年は皆ここにはいないけど、よかったら村でまた聞かせてね」と感謝を伝えていました。同行していた県立福島商業高校生徒会の皆さんとも交流し、心温まるひとときを過ごしました。

地域で支え合う力を高めよう 認知症サポーター養成講座

6月21日、いいいて活性化センター「いちばん館」で、村地域包括支援センター主催の「認知症サポーター養成講座」が開かれました。「認知症サポーター」とは、地域で暮らす認知症の人やその家族を応援する人のことで、何か特別な活動をするわけではありません。認知症を正しく理解し、認知症の人や家族が困った時には応援ができるよう、知識を蓄えます。今回は、村や関係機関の職員が参加し、講話を通じて、認知症の症状やかかわり方、先進地の事例などを学びました。



郡山市医療介護病院で看護部長を務める宗形初枝さん(上の写真右端)の講話。養成講座を受講した人は、認知症サポーターの目印となるオレンジリングを受け取ります(右)



道の駅に巨大迷路が出現 ダンボールパークでわくわく



スタッフにアドバイスをもらいながら、楽しく工作。夏休みの初日の思い出を持って帰れるね

7月21日、「いいいて村の道の駅までい館」で、巨大迷路や工作を楽しむイベント「ダンボールパーク」が催されました。段ボール製の大きな迷路は、イベント広場いっぱいに設置され、訪れた子ども達が、繰り返し楽しんでいました。また、段ボールを使った工作のコーナーでは、鉛筆立て、家やトラックの模型などを、好きな色で装飾し、一生懸命作っていました。道の駅では8月11日に、開業1周年に合わせた記念イベントも予定しています。(P19参照)



村婦人会が視察研修 話題の道の駅で魅力を探る

7月8日、飯館村婦人会(長谷川花子会長/前田)が、国見町と伊達市霊山町の道の駅を訪れました。村に道の駅が開業して約1年、手芸品や農作物を出品する女性が少しずつ増えており、生きがいづくりの面から、女性の視点で取り組めることがあるのではないかと考えての先進地視察です。「道の駅国見あつかしの郷」では、鈴木亮一支配人の講話、施設内の惣菜バイキングでの昼食、寄せ植え体験などを通して、利活用の現状や、魅力アップのポイントを実感しました。



写真は「道の駅国見あつかしの郷」の様子。互いの近況を伝え合い会員同士が親睦も深めました

北米の音楽ジャーナリスト いいいてっ子と出会う

7月9日、村の小中学校を、北米の音楽ジャーナリストら12人が訪れました。この訪問は、音楽を通じて福島を発信する「ミュージック・フロム・ジャパン(三浦尚之代表理事)」の事業の一環です。来場者は、児童・生徒の歌や民俗芸能に高い関心を寄せ、「コミュニティの力を目の当たりにした」「ダンス(田植踊り)の持つ力に感動した」と賞賛の言葉が相次ぎました。また、村復興アドバイザーの田中俊一さんが、原発事故の概要と共に村の魅力も伝える基調講演を行いました。



中学2・3年生の見事な田植踊り。会場が大きな拍手に包まれました



小学生と中学1年生は、村民歌と「までのロンド」を披露しました

※6泊8日の旅の様子は次号の9月号でお知らせする予定です



高野龍晴さん(中学2年生)の「誓いの言葉」。「一致団結し、一人ひとりが目標を達成してきます」

未来への翼 北欧編がスタート 福島駅西口広場で出発式

7月22日、「未来への翼」に参加する中学生13人を中心とした一行が、JR福島駅から出発しました。震災後の平成23年秋にスタートした「未来への翼」は、9回目となる今回、初めて北欧を目的地としました。福祉の先進地で、幼児教育や高齢者福祉の現場を訪れ、心豊かな社会の在り方を考えます。参加者の1人、石井樹理さん(中学2年生)は県外からの参加。少し緊張しながらも「初めての海外なので楽しみです」と話しました。家族らの見送りを受けていよいよ出発。実り多いよい旅になりますように。